
当世柳生新陰流異聞 ～ 幼年時代（「あいつ」外伝）

泊瀬光延 & サー・トーマス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

当世柳生新陰流異聞 〔幼年時代（「あいつ」外伝）〕

【Nコード】

N0037J

【作者名】

泊瀬光延&サー・トーマス

【あらすじ】

柳生林太郎、八歳。厳しい祖父の指導の元に新陰流の奥義を身につけていく。林太郎を剣の道に誘い込んだのは、三歳年上の兄弟子の存在だった。現代に古武道の道統を一心に守る人達が登場します。著者の古武道の研究からの、現代剣道では廃れてしまった技への蘊蓄が少しあります・・・BL風味も・・・

1 少年剣士（前書き）

サー・トーマス作「あいつ」の外伝として、設定を借りて書きました。柳生林太郎という主人公の少年時代の同性への憧れ・初恋と武道という二筋の流れを描きます。

1 少年剣士

どすん！

跳ね飛ばされ、道場の板目に叩き付けられた少年は気を失ってしまつた。

ざばっ！

「ひゃ！」

冷たい水をバケツから掛けられて、少年は目を醒まして飛び起きた。頭をぶるぶると振ると滴が四方に飛ぶ。

「もう、へたばったか？嫌ならおかあちゃんのおっぱいの所へ帰るが良い」

宗義はまだ八歳の少年にからかう様に言う。彼はこの少年の祖父だ。そして、剣術の師でもある。少年が今でもそう思っているかは分からないが。

「いやだ！くそじじい！」

四つんばいになって、そばに落とした袋竹刀を引たくって立ち上がった。

女の子の様な長い髪から水が滴って胴着を濡らす。齒を食いしばって祖父を睨む顔は、幼いころの興福寺におわす阿修羅様と言ったところか。

孫への愛おしさが込み上げるのを、六十二歳の宗義は押さえ、心を鬼にして幼い修行者に竹刀を向けた。

少年には、自分の倍の背丈のある鬼が向かってくる様に見えただろう。

鬼は、大上段に定寸じやうすんの袋竹刀（日本刀と同じ全長約九十センチ）を上げると、少年の前にずいと踏み出す。

少年ははつと目を見開き、本能的に右肩をくるりと前に突き出し、肩と同じ方向に右足を踏んだ。その方向は、祖父がこちらに進んでくる道筋だ。

手にした竹刀は、中太刀（全長七十センチほど）である。まだ定寸だとこの少年には長すぎる。その竹刀の柄を右足の腿の左に添え、先を下げて構えた。切っ先は右足の右斜め前に位置している。

（よし！刀中蔵の構えが身に付いてきたな！）

宗義はほくそ笑んで、軽く少年の頭に竹刀を振り下ろした。

大人が軽く打つても、子供にとつてはそうではない。ましてや達人の打ち込みである。竹刀の切っ先は速い。防ぎ損じると頭に痛い一撃が来る。さっきもそれで昏倒してしまったのだ。

『刀中蔵』とは、自分の身体の前に、常に太刀先を身体とクロスして出していることだ。即ち、そのまま手を上げれば、相手が真っ向から斬つてきても受ける事が出来る。刀を盾として常に身を守る体勢なのだ。

そしてこの稽古は身を躲して太刀を避けるのではなく、その振り下ろされる刃の下に身を晒して、その禍かを利用して攻撃に転じる技の修練なのだ。

少年は、祖父の刀が自分の頭に振り下ろされるのを、ぎりぎりまで見ていた。その黒目がちの大きな瞳に恐れは無かった。幼く無心のその表情は、穏やかな思惟を続ける弥勒のものとも思えた。

竹刀が頭に当たろうとした瞬間、少年の中太刀は足先から跳ね上がり、右足を少し前に進めたと同時に、その切っ先が祖父の竹刀を

跳ね飛ばした。

「ほう！」

宗義は喜びのあまりに声を出した。

老人の竹刀を撥ねたとたんに、その反動で少年の背中に中太刀は隠れて見えなくなった。

宗義は後ろ足を引いて身構えた。

その刹那、少年の後ろから頭の上に中太刀が引き上げられ、今度は少年が大上段の構えになる。そして今度は左肩が前にくるりと回り、左足を踏み込みながら宗義の右横面に中太刀が飛んできた。現代剣道では見られない、足を踏み換える『歩み足』である。

そしてこの動作は、柳生新陰流の必殺技、『流し打ち』と呼ばれる。『流し打ち』は相手の上段からの太刀を頭の上で受け流し、反動で自分の太刀を輪の様に背中から回して、そのまま反撃する技である。

他流派からは、『輪の太刀』または『魔の太刀』と呼ばれ、怖れられた技なのだ。

宗義が喜んだのは、少年が器用に竹刀を背中に回して、『流し』で反撃出来ただけではない。それよりも、祖父の太刀を受けたタイミングだった。

新陰流には、敵の太刀を防ぐ方法が三種類ある。二つはすぐ分かるだろう、『止める』と『かわ躲す』である。三つ目は『合い掛け』という。

実は『合い掛け』こそ新陰流の極意中の極意なのだ。

夏休みと冬休みにしか祖父のもとに来ない少年は、二年足らずで祖父の攻撃を見事な『合い掛け』で返したのだ。その天性の才能を宗義は認めた。

2 今連也

少年が祖父の薫陶を受けている場所は、まだ回りが畑だらけだった頃の湘南の長沢の丘にある道場だった。

少年が一人で祖父の家に遊びに来る様になったのは、二年前の六歳になって小学校に入ってからだ。

少年は、小学校の夏休みで、実家の長野から祖父の家に遊びに来ていた。それまでは両親と来ていたが、三浦半島の自然が気に入って、両親にせがんで一人で鉄道に乗り、来る様になった。周に何度か、祖父と弟子達がやっている剣術の稽古を時々覗いていたが、始めは特に興味は示さなかった。

近所の農家の子等と海水浴やとんぼ狩りをして遊び回っていた。

祖父は剣術を少年に強制する事は無かった。

ところが湘南に来て十日ぐらい経つと、少年はそつと稽古を見る様になった。見つかるやってみろ、と言われるので物陰からそつと見物する。

道場の祖父はまだ壮年と同じ活力を維持しており、その弟子達への教えは厳しかった。彼らがやっているのは、防具を着けない古武道で、袋竹刀と呼ばれる日本刀と同じ長さに切られた竹を中程まで割って、牛の皮で包んだ得物を使う。

普段は形が決められた稽古ではあったが、上級者は試合を行っていた。現代剣道とは違って、腰と足をどっしりとさせて戦うし、竹刀の長さが1メートル弱しかないので、拳や小手を狙う攻防が多い。時には怪我人も出る。

弟子達は関東一円から集まって来て、こういう連中が集まるとお

決まりだが、稽古の終わりには大酒を飲んで騒いだ。道場に入門した順が唯一の上下関係で、歳も職業も異なる人達が剣術という絆だけで結ばれている。若くても先に入れば先輩である。だが、先輩でも年上には礼を尽くす。奇妙な相互尊重の中に酒が程よい緩衝材となる。それが不思議な事に弟子達の結束を固めていた。

祖父は弟子達の一人一人の上達を全て把握しており、進歩が遅い早に関わらず、一歩進むに必要とされるポイントを指摘して行く。それが皆に慕われている要因だった。

弟子の中に、逗子から父に連れられて稽古している、少年より三歳ほど年上の男の子がいた。

彼は父と一緒に祖父に入門して、最年少の弟子ということだ。三太と呼ばれていた。

ある日、三太は道場にはいる時、駆けてきた少年とぶつかった。彼はびくともしなかったが、少年は尻餅を突いてしまった。三太は少年の容貌を見てびっくりしたらしく、助け起こす事も忘れた様に突っ立っていた。

三太は若干九歳であったが、少年よりも顔が一つ高く筋骨も逞しかった。だが二人とも少年らしく、ぶつかった柔らかい感触がお互いに余韻とした残っていた。

昔ながらの稽古着に身を包み、武家の子供の様に背筋を伸ばして自然に立つ三太の姿は、少年に取っては眩しかった。

少年は自分で起きあがると、三太にべーっと舌を出して彼の横を駆け抜けた。

少年は近くの遊び場の森に行くと、農家の悪童達が集まって来た。彼らとは既に一悶着あったが、この数日の間に一緒に遊ぶ様になっていた。

「りんさ、今日はぶつ叩いてやるぞ！」

悪童達は、テレビの時代劇の忍者の様に背に棒を背負っていた。
「ふん！出来るもんならやってみろ！今日はこれだ！」

少年はズボンのポケットから、道場の宴会のために用意されていた台所のイカの足の薫製の袋を見せた。

「おお！それは貰った！」

悪童達は背から忍者がやるごとく、棒をすらと抜いた。少年は獲物を持っていないが、にこにこしている。

「えいやっ！」

一人が少年の肩に向かって棒を振った。頭と顔は狙わないという取り決めがしてあった。しかも細い棒なので当たると折れてしまうだろう。だが少年の身体に棒が当たれば折れても目的は達せられるのだ。

少年は相手を引きつけるだけ引きつけた。そして棒が肩に当たる前に素早く身を避ける。空を切った棒を握る手を抱えて、足を払った。

「うわっ！」

その棒は少年の手に移った。

「くそ！みんなで一斉に行くぞ！」

餓鬼大將が皆を焚きつけるが、少年が睨むと足並みが揃わなくなつた。

「やっ！」

「いたっ！えーん！」

少年は軽々と悪童達の棒を避け、手をぴしやりと打ったり、尻をぶつたりした。

少年が逃げ腰の二人の悪童に向かおうとした時、背中にぴしと枝が当たった！

「やった！りんさ、討ち取り〜！」

真っ黒に日焼けしたおてんばな女の子が、飛び上がりながら万歳

をしながら笑った。

ほんの少し掠っただけだったが、少年は呆れた顔をして棒を下に下げた。

「ちえ、林檎に今日はやられた！これ上げるよ！」

舌なめずりする餓鬼大将に薫製の袋を渡すと、皆で丸くなって食べ始めた。

餓鬼大将が言う。

「りんさ、すげえなあ！最初見た時、女の子かと思ったけど、つええ！」

膝を抱えてイ力を頼張っている林檎が言う。

「当たり前でしょ！りんさのお祖父さんは剣術の先生だし！」

少年は上品ににこと笑うと、

「別に剣術なんか習ってないよ！またやろう！」

とんぼや蝉を追い回して夕暮れ近くになって、少年は皆と別れると道場に帰った。満面得意であった。

（えへ！俺、やっぱり爺ちゃんの血を引いてるのかな？稽古やってるとこ、見ただけであいつらをやつつけた。剣術なんて簡単なんだ）少年はそう考えたが、本格的に稽古なぞやるつもりはとんとなかった。

3 決闘

夜の宴会の様子を、戸口で興味深そうに見ている少年を三太は見つけた。

子供なのでジュースしか飲めず、酒臭い大人のどんちゃん騒ぎを白けて眺めていたので退屈だった。

彼は少年の前に行くと、湘南の言葉で言った。

「やあ、可愛い子じゃん！俺がお菓子、持って来てやろう」

少年は声を掛けられて、びっくりして三太を見上げていたが、腹が立った。

「俺、女じゃないもん！」

三太は目を丸くした。少年の顔を近くでまじまじと見て、

「嘘言うな。お人形を持ってた方が似合うぞ」

「嘘じゃない！その証拠にお前なんか簡単に負かしてやるぞ！」

「へえ、無理無理！」

「じゃ、こつちこい！」

少年は宴会の座敷から走って、裏の道場に駆け込んだ。後から三太が袋を持って追ってきた。

三太は、薄暗い道場の真ん中で、袋竹刀を持って仁王立ちしている少年を見た。まるでお雛様が怒ったみたいだ。道場主の孫ということは分かっていたが、こんなに可愛い子とは思わなかった。友達になりたいと思った。

「止めるよ。分かったから。それより飴、食おう！」

三太が飴をたくさん持って差し出した手を、少年は平手で払った。飴の袋が道場に散乱した。

少年は、なぜ自分が怒っているのか分からなかった。もう一度三

太を見たくなくて覗いていたのだ。

背が高く日に焼けて、真つ黒な三太を宴会の席で見つけてときどきした。そして三太が自分を見て近寄ってきた時、逃げようかと思つた。でも腰が抜けた様に動けなかったのだ。

そしていつもの事だが、女の子に間違われた。

大人が間違えるのには慣れっこで抵抗が無くなっていたが、同じくらいの子供にも、女みたいに扱われるのは我慢が出来なかった。特に、三太のような男の子に・・・

せつかくの飴玉を床に落とされた三太は、眉を怒らせて言った。
「おいら、怒ったぜ！本当においらとやるんだな！」

林太郎は道場で見た様に、竹刀を前に構えた。みんなの稽古を見て、あんなの簡単だと思っていた。腰を落として、右足を前に出し体重を掛けた。

「しかたねえっべ！」

三太は、壁に掛かった、少年が持つと同じ中太刀を取る。そして右手に提げて林太郎に近づいて行つた。

林太郎は驚愕した。

昼間の悪童達の様に、時代劇みたいにいざなどと言って構えると思いきや、何事も無い様に竹刀をだらりと下げて、するすると近づいてくる。これでは相手の次の動きが分からない！

ちゃんばらと何か違う、という直感が林太郎に囁いた。背筋がぞくつとして手が震えた。

「やあ！」

林太郎は目の前の三太に向かって中太刀を振り上げ、カ一杯打ち込んだ。竹刀は頭の上で深く振りがぶられ、切っ先は林太郎の背中から尻まで達した。

びゅんと音がして、林太郎の竹刀は三太の頭に当たる、と思つた

瞬間、

ばしっ！

右手の手首に激しい痛みが走った。

林太郎の竹刀は真っ直ぐに振られたのだが、空を切り、三太の左を掠めて落ちていた。

三太は一瞬のうちに大上段に取り上げ、林太郎の打ち出してくる右小手を、左上から右下への斜斬り^{はす}で撃ったのだ。その後、後ろとなった右足を左斜めに退けて、からりと体を回し林太郎の太刀筋を避けた。

「う……」

林太郎は竹刀を落とし、膝を崩してその場に座り込んだ。右手の手首が痛みで痺れて動かなかった。

「だ……大丈夫か？」

三太は自分のやったことの重大さに驚いて、林太郎の手を取った。自分よりも小さい子を打つなんて。

「い……嫌だ……放せ……」

しかし林太郎の身体は痛みで竦んでいた。

「ご免……待ってる！」

三太は道場を駆け出ると、しばらくしてタオルと手桶に井戸水を汲んで帰ってきた。宴会場では大笑いが聞こえる。

冷水を搾ったタオルを、三太は林太郎の手首に巻いてやった。真っ赤に腫れていた。

4 約束

林太郎は泣いた。

口惜しかったし、三太に勝つどころか無様に負けたことが情けなかった。三太に一番、見せなくなかった自分だ。可愛い綺麗な顔がくしゃくしゃになった。

「う・・・うつう・・・」

三太は林太郎の前に座り込んで謝った。

「許してけるや！つい、本気で打っちゃった・・・お前の振り、鋭かったから」

林太郎はきつと三太を睨んで言った。

「お前だつて嘘つきだ！俺が女みたいだから・・・そう言って慰めているだけだろ！」

三太は目を丸くして林太郎を見た。

林太郎ははつとして目をそらし俯いた。涙がぼたぼたとその大きな瞳から流れ出ていた。

三太は、道場の外から照る月の光にきらきらと落ちる宝石を、口を開けて見ていた。こんなきれいなものを見た事が無かった。

三太の顔が林太郎に近づいた。

「！」

ばしっ！

林太郎は、三太の顔を思い切りひっぱたいていた。

三太はその拍子に後ろに転がり、背中から一回転しそうになる。しばらく尻を上げたその窮屈な姿勢を続け、足を丸くして両方の足の裏を付けていた。その姿勢から戻り、胡座をかいて林太郎に向い

た。

三太の左の頬は、林太郎の手の跡がありありと付いていた。三太はその跡を触れない様に手を翳して、

「痛つて〜！・・・でも美味かつた〜！」

三太は、林太郎の涙を舐めたのだ。

林太郎は力が抜けて、はあはあと言いながら三太を見ていた。ぼそと言った。

「強く・・・なつてやる！」

「え？何？」

三太は、林太郎が小さな声で言った事を聞き返した。

林太郎は大きな声で叫んだ。

「お前より強くなつて、お前をこてんぱんにしてやる！」

三太は笑った。

「あはは！その調子だ！可愛い子ちゃん！」

林太郎は宣言した。

「二年後、今日と同じ日にお前と決闘する！」

三太は口をあぐりとして、

「・・・本気・・・？」

林太郎は三太を睨んで頷く。

「お前にそんな可愛い顔で睨まれても恐くねえぞ。それに俺・・・忘れっぽいんだ。約束するには、なんか、証拠が欲しいね」

「証拠？」

「ほら、けいやくしよ、みたいな。親父がお前の爺さん、いや、先生に入門する時、何か書いてたぜ」

「・・・どんな証拠が要るんだよ？」

「お互い、絶対に忘れない様なものだ・・・」

「？」

「それで二人だけの秘密になるもの・・・」

三太の顔がゆっくりと近寄ってくる。

「秘密・・・？」

林太郎の息が三太に掛かる。潮騒の匂い。

「そう、秘密・・・」

二人の柔らかい唇が触れ合った。

林太郎はその翌日から、祖父に新陰流の教えを請うた。祖父は喜びを隠しながら、厳かに言った。

「林太郎。一度、男が決めたら後戻りは出来んぞ！」

「お爺ちゃん・・・いえ、お師匠様。絶対止めません！」

（二年経って、『あいつ』を負かす日まではね・・・）

林太郎は祖父の前に正座しながら、心の中でぺろと舌を出した。

三年経ち、林太郎はあの時の三太と同じ歳になった。合い掛けを会得してさらに上達していた。一年前に彼らは立ち会うはずだったが、しかしそれは実現しなかった。

三太は林太郎と会って一年後に、家の事情で北海道に引っ越して行った。

彼らの秘密は三太との別れで永遠となった。

林太郎は、三太が最後に言い残した言葉を忘れない。

「おいらはもう、新陰流は出来ないかも。北海道に稽古するところ、無いって言うから。でも他の流派でも剣術は続けるつもりだ。もっと新陰流、やりたかったな・・・りと・・・一生・・・」

了

三太が林太郎の小手を打った技を、取上げ使いの『ざんていせつてつ斬釘截鉄』と

呼び
ます。

4 約束（後書き）

御読了有り難う御座いました。林太郎は6歳から剣術を習い始めますが、剣を極める修行を成し遂げるためには、6歳からの開始が最低必要と言われています。柳生石舟斎は79歳の晩年まで修行を続け、その技を孫の兵庫助に伝えようと思いました。これは伝書の奥付で分かる事です。

林太郎はその後、サッカーを始め、世界的な選手になりますが、この武道の身のこなしが役に立った事は言うまでもありません。

ここに出てくる新陰流の技を小説中に使用したのは私が始めてと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0037j/>

当世柳生新陰流異聞 ～ 幼年時代（「あいつ」外伝）

2010年12月13日18時25分発行